

## 雍正六年における暹羅国の中国語通事について

王 竹敏

**要旨** 清代中国はアジアの大国として、海外との朝貢関係が多く見られた。東南アジアの小国暹羅国は、清代以前の明代から中国に朝貢していた。その暹羅国と中国との関係は、朝貢関係以外に米穀貿易があり、清代中期の雍正から頻繁になった。雍正六年（1728）六月に暹羅国王の命で中国の厦門へ米を発売する陳宇の船が赴いたところ、海上で大風に遭遇し雍正六年（1728）八月に海南島榆林港に漂着した。たまたま、雍正六年（1728）十二月に、マニラから咬留巴（カラバ）へ行く商船が海南島の北洋敦に漂着した。その船の外国人五人は中国語が出来なかったため、たまたま海南島に滞在していた暹羅国船の通事が、地元張奇とその外国人五人の通訳を行っている。通事陳宇の通訳によって両方の意思の伝達が行われた。張奇は通事陳宇の通訳により、外国人の漂流に至った事情を聞知した。その後、その外国人は雍正六年（1728）九月に来航した暹羅国朝貢船に搭乗して、一端、暹羅国に護送され、本国に帰国したようである。

そこで本稿では、清朝中国へ来航した暹羅国の中国語通事はどのように通訳を行ったかについて、雍正六年（1728）十二月に、マニラから海南島に漂着した船の乗員の通訳の事例を中心に検討したい。

**キーワード** 雍正時期 中国 暹羅国 中国語通事 漂流民

### 1、はじめに

清代中国は、広州に窓口を設け開港し、特に西欧諸国等と「一口通商」政策を実施した。清朝と外交関係がある国が増加するにつれ交流が盛んとなるが、他方中国商人による海外貿易も盛んとなった。特に華南沿海地方から多くの中国商船が海外へ向かい、海外からも商船が広州や厦門などに来航している。<sup>1</sup>

清代において乾隆時代までに中国と朝貢関係があった国は、数十カ国にのぼる。<sup>2</sup>海上より中国へ来航する頻度は、毎年のような琉球のほか、五年ごとの蘇禄や十年ごとの暹羅などがあつた。海上貿易の発展につれ多くの中国商船が東アジア海域の島嶼部に赴いた。しかし当時の造

<sup>1</sup> 松浦章『清代海外貿易史の研究』、朋友書店、2002年1月。

<sup>2</sup> 『明史』外国傳、『清史稿』外国傳による。

船技術や航海技術の問題や天候の予測が困難であったためか、多くの船舶が中国沿海地方に漂着している。中国は当時アジアの大国として、これらの漂流民らを故国、郷里へ護送した記録もよく見える。<sup>3</sup>しかし問題になるのは漂流民らと言葉がよく通じないことであり、通事の役割はきわめて重要であった。<sup>4</sup>

中国と暹羅国との間に行われた米穀貿易は中暹貿易の重要な部分であった。<sup>5</sup>その結果、中暹関係は友好な朝貢関係が促進された。清代初期において中国の華南地方では耕地稀少や人口急増のため、米穀の供給に不足の現象が出現した。康熙後期になるとこの問題がさらに厳しくなったため、清政府は外国から米を輸入した。<sup>6</sup>その中国へ米穀の供給地とされたのが暹羅国であった。暹羅国は気候や土壌の条件から米穀の産量が極めて多く、雍正時期になると中国への重要な米穀輸入国となっていた。そのため、次に述べる暹羅船も暹羅国王の命令で米穀を中国へもたらし発売する船であった。

そこで本稿では、清代中国へ来航した暹羅国船に搭乗していた通事がどのように通訳の業務を行ったかについて、漂流難民を通訳した記録をもとに検討し、清代における外国からの通事<sup>7</sup>について究明するための試論としたい。

## 2、清代の暹羅国

暹羅国は、明清時代において中国の重要な朝貢国である。地理的位置の記載について、『清史稿』列伝、暹羅国の条に、

暹羅、在雲南之南。緬甸之東、越南之西、南瀕海湾<sup>8</sup>

とあり、暹羅国は雲南の南、緬甸の東、越南の西にあり、南は海と隣接している。

暹羅国と中国の関係は、明初から見られ、明代の萬曆45年(1617)には中国に来貢した暹羅国の使節がもたらした進貢品の詳細が明らかにされている。<sup>9</sup>

<sup>3</sup> 松浦章『近世東アジア海域の文化交渉』思文閣出版、2010年11月、219～231頁。

<sup>4</sup> 松浦章『近世東アジア海域の文化交渉』255～283頁。

<sup>5</sup> 高崎美佐子「十八世紀における清タイ交渉史」、『お茶の水史学』第10号、1967年12月、18～32頁。

湯開建、田渝「雍乾時期中国與暹羅国的大米貿易」、『中国經濟史研究』2004年第一期、經濟研究雜誌出版社、2004年、81～88頁。

<sup>6</sup> 張維屏「粵食」、『廣東文徵』第五冊、香港中文大学出版社、1978年、418頁。

<sup>7</sup> 松浦章「明代的海外各国通事」、『明清時代東亞海域的交流』(鄭潔西等訳)、南京・江蘇人民出版社、2009年11月、42～55頁。

<sup>8</sup> 『清史稿』第七冊、列傳三百十四、屬国四、暹羅、5779頁。

<sup>9</sup> 松浦章「万曆四十五年暹羅国遣明使—明代朝貢形態述論」、『明清時代東亞海域的交流』(鄭潔西等訳)、南京・江蘇人民出版社、2009年11月、78～92頁。

暹羅国が清朝に朝貢した最初は康熙二年(1663)のことである。『清史稿』列伝、暹羅国の条に、

清康熙二年、暹羅正貢船、行至七洲海面。遇風漂失、護貢船一至虎門。仍令駛回。三年七月、平南王尚可喜奏、暹羅來餽礼物。卻不受。其年。議准暹羅進貢。正貢船二艘、員役二十名。補貢船一艘。員役六名來京。並允貿易一次。<sup>10</sup>

とあり、清康熙二年(1663)に、暹羅国が派遣した正貢船は海難に遭難して不明となり、副貢船だけが広東虎門に到着したが、清朝はその船では暹羅国の朝貢を認めなかった。そのため副貢船は帰帆するしかなかった。

また康熙三年(1664)七月に、暹羅国は再び正朝貢二隻と副貢船一隻そして二十名員役を派遣して中国に朝貢してきた。清朝は、この時は朝貢を許可して六名の使節が北京に赴いている。

暹羅国は中国との朝貢関係を重視し、明代からの朝貢関係の継続を願っていたと言える。

暹羅国は康熙三年に続いて四年(1665)にも朝貢使節を中国に送っている。

明年(康熙四年)十一月、定暹羅貢期三年一次、貢道由広東常貢外。加貢無定額。貢船以三艘為限。每艘不許逾百人。入京員役二十名。永以為例。<sup>11</sup>

とあり、康熙四年(1665)十一月には、康熙帝は、暹羅国を中国の朝貢国として認め、貢期を三年ごとに、貢道を広東からとして上京し、貢船の数量を三艘とし、来貢人数を百人と決め、その内、北京に赴く上京人数を二十人に限定するとの朝貢規定を定めたのである。このように暹羅国は、清朝から正式な朝貢と認められると、その朝貢の回数は多くなり、両国における良好な関係がますます深まった。朝貢に伴い暹羅と中国の貿易も盛んになった。

そして、ますます多くの中国人が暹羅へ赴いた。清末の宣統二年(1910)当時、暹羅国の人口が八百万人であったのに対して、その内中国人が三分の一に到達する<sup>12</sup>とまで言われるようになったのである。

### 3、清代暹羅使節の通事の業務

清朝中国へ来航した暹羅国の使節団の通訳が、どのように通訳したかについて、雍正六年(1728)十二月に、外国から海南島に漂着した船の乗員の通訳に際して、暹羅国の通事が関係した事例を中心に検討したい。

#### 1) 暹羅国王の命で中国へ赴いた雍正六年の暹羅貿易船

諸外国のうちで、米穀の輸出国として、中国と最も密接な関係が持っていた国は暹羅と思われる。朝鮮からも米穀が輸入した事実が存在したが、それがほぼ宮廷の祭祀用に供するに過ぎ

<sup>10</sup> 『清史稿』第七冊、列傳三百十四、属国四、暹羅、5779頁。

<sup>11</sup> 『清史稿』第七冊、列傳三百十四、属国四、暹羅、5779頁。

<sup>12</sup> 『清史稿』第七冊、列傳三百十四、属国四、暹羅、5783頁。「宣統二年…人口八百万。中国人占三分之一。」による。

た。この問題に関して、安部健夫の「米穀需給の研究—『雍正史』の一章としてみた」<sup>13</sup>において、雍正時期に各地方の米穀の需給や各省間米穀の流通することに明らかにされている。

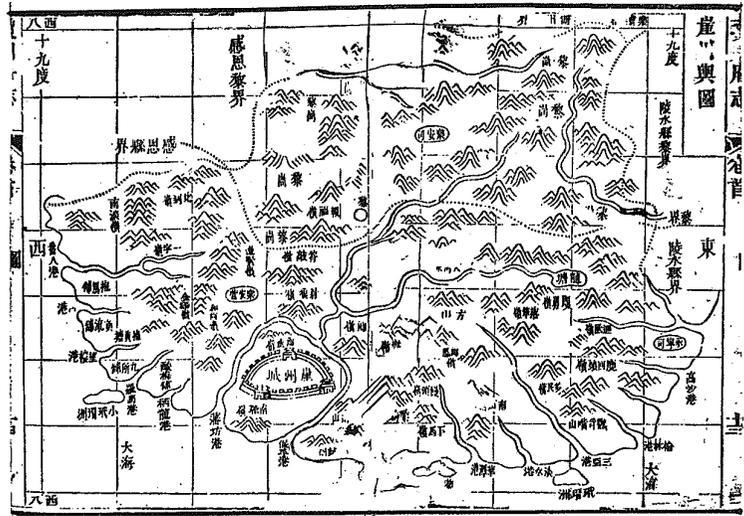
さらに、暹羅国の米穀の輸入状況について、王慶雲『熙朝紀政』「紀海舶米糧」に、  
 (康熙)六十一年。暹羅国人言。地饒稻米。一石直銀二三錢。諭令販運三十万石於閩、粵、寧波。免其稅。雍正二年。米至粵。得旨。暹羅国王不憚險遠。進獻稻種果樹。恭順可嘉。令地方照時價發售。特免壓船貨稅。其後至各省。免米稅如例。時以閩浙產米不敷。弛南洋之禁。令民得往貿易。<sup>14</sup>

とあり、暹羅国は米穀が大量に産出する国として、康熙六十一年(1722)の皇帝の免税諭令によって、一石ずつ二三錢の値段で、閩すなわち福建、粵すなわち廣東、そして浙江の寧波へ発売していた。雍正二年(1724)に、米の商船が粵すなわち廣東の港がある広州に到着した。さらに、雍正帝は暹羅国王が海難を恐れないとして、暹羅船がもたらした蘇木、鉛錫、海參、烏木などの貨物も免税し発売することを許可した。

このように雍正期前後の清朝は、外米特に暹羅米の輸入に積極的な政策を取り入れていたことは明らかである。さら

に、康熙六十一年(1722)から雍正時期の間に、暹羅米船の来航は多く一年に二艘が見られた。<sup>15</sup>

雍正六年(1728)に、暹羅国王の命により中国に来帆した暹羅船は、清朝の免税政策の対象となった船である。しかし、この暹羅船は、雍正六年(1728)八月十三日に、海南島の崖州營<sup>16</sup>榆林港<sup>17</sup>に



図一、崖州榆林港(右下部分に榆林港名が見える)

<sup>13</sup> 『雍正時代の研究』東洋史研究会、同友舎、1982年2月、120～215頁。

<sup>14</sup> 王慶雲『熙朝紀政』巻八による。

<sup>15</sup> 湯開建、田渝「雍乾時期中国興暹羅国的大米貿易」、『中国經濟史研究』2004年第一期、經濟研究雜誌出版社、2004年、81～88頁。

<sup>16</sup> 崖州とは、光緒『瓊州府志』巻十八上、海黎志、海防に「崖州、三亜港東接萬州、西達昌化、東南風發、前代時有太泥諸番、沿海登岸搶掠、最宜防守」とある。確かに、萬州縣と昌化縣の間であった。そのほか、崖州營は外国人がよくここに着岸し財物を強奪するため、設置された海防機関であった。

漂着した。この漂着に関して雍正六年（1728）九月二十二日付の広東瓊州総兵官駐節瓊州府城施廷専の奏摺に記述が見られる。

茲雍正六年（1728）九月初五日、奴才、据崖州營遊擊范釋呈報、八月十三日、有暹羅国洋船、收到該營、榆林港、查收該船彝商具単報称、暹羅国王船主陳宇、財副何晃既癸卯年押紅皮船往廣東、查探貢二船不回暹羅情由者、宇等該國王令着押紅皮船、運米到厦門発売... 因七月二十七日在洋把風□□收到榆林港所報是實等情... 於雍正六年六月十八日在暹港開行、不料于七月二十七日在洋把風貸渴貨物丟水無算不知多少。至八月十三日飄泊榆林港、舵水七十九名、番厮八名俱各平安、桅舵□好風帆破□、今船要住榆林港修整得好、明年三月間南風盛。發復往厦門...<sup>18</sup>（□：判読不明文字）

とあり、海南島にあった崖州營の遊擊范釋の報告によれば、雍正六年（1728）八月十三日に、暹羅国の船が崖州營榆林港に漂着した。船主陳宇は暹羅国王の命で厦門へ米を輸送し発売するつもりであったが、しかし、七月二十七日に大風により遭難し、貨物のほとんどを海水に投げ捨て、八月十三日に榆林港に漂着した。船には舵工や水手合わせ全員で79名いたが、これらの人はおそらくかなりのひとが中国人であったと思われる。ほかに外国人が8名いた。この船は榆林港で修理され、翌年三月の南風の季節の時期に厦門へ向かうことになった。榆林港は海南島東南部にある港口である。図一の崖州榆林港地図参照<sup>19</sup>。

陳宇の船は、雍正六年（1728）八月十三日に榆林港に漂着したあと翌年の三月まで海南島に在住している。彼等が海南島に滞在している時に、たまたま雍正六年（1728）十二月初七日に彌尼喇（マニラ）からの船が瓊山県に漂着した。

## 2) 雍正六年の暹羅国朝貢船

陳宇の船とは別に雍正六年（1728）九月初に暹羅国の船が中国の広州に到着した。この暹羅国の船が中国へ来航した理由について、雍正六年（1728）十月初八日付けの王士俊の奏摺に、雍正五年八月内、有暹羅国葉舜徳船隻、装載米石往浙閩發賣。被風飄至広東虎門前、署撫臣阿克敦指称新米船隻、遣莊耀索銀六百兩。本年正月前撫臣楊文乾自閩回粵、訊明原委、將銀照數給還葉舜徳領回。今暹羅国王感激皇上加恩外番至意、遣使進貢。…本年九月二十八日、據暹羅国貢使朗徹述申黎嘯等赴臣衙門具呈稱使等奉命入貢、臨行之時、偃朗朱歷面付稟呈併土物七色令使等賣來叩謝巡撫都察院楊大老爺...<sup>20</sup>

とある。雍正五年（1727）八月に、暹羅国葉舜徳は、暹羅国王の命で米を輸送し、浙江省か福建省に赴いて発売するつもりであったが、途中で大風に遭難し広東の虎門に漂着した。地方官

<sup>17</sup> 榆林港とは、光緒『瓊州府志』卷四上、輿地志、山川に「三亜港又名臨川港、在城東一百六十里、受三亜水入海、北有榆林港」とあり、確かに三亜港の北の港口であった。

<sup>18</sup> 『雍正朝漢文硃批奏折』第十三編、江蘇古籍出版社、1991年3月、526~527頁。

<sup>19</sup> 光緒『瓊州府志』卷首、序、崖州輿圖による。

<sup>20</sup> 『宮中档雍正朝奏折』第十一輯、(台北) 故宮博物院、1978年9月、498~499頁。

の阿克敦は莊耀を派遣し、新米を輸送するとの理由で葉舜徳に銀六百両を要求した。しかし同年（1727）十二月に、撫臣楊文乾が福建から戻り、この事件を究明して葉舜徳に銀両を返還した。この事件の処理に感謝した暹羅国王が、謝恩のため中国へ朝貢船を派遣したのである。その朝貢船が雍正六年（1728）九月に広州に来航したのである。

### 3) 海南島に漂着した呂宋船

雍正六年（1728）十二月初七日に、外国人 5 人が乗った小船が瓊山県に漂着した。<sup>21</sup>

雍正七年正月十六日、□前往広東総督孔（不明）批、據瓊山県申詳為押送事稱、雍正六年十二月初十日、蒙本府信牌本年十二月初九日、准瓊州鎮差委千總曹國標押送彝人五名、到府合行發訊備牌仰県、即將發去彝人五名、火速訊明係何國人名、于何年月日、其船作何漂流、至何処港口登岸。作速訊明口供具交通報、該県仍支給口糧、加意撫恤、毋致失所、事幹外国人氏毋得遲延等因。<sup>22</sup>

とあり、雍正七年（1729）正月十六日、広東省総督孔氏の批文により、瓊山県から呂宋国漂流民の事を報告してきた。この報告によって、雍正六年（1728）十二月初九日に、瓊山鎮の曹國標は呂宋国漂流民らを瓊州府に押送した。雍正六年（1728）十二月初十日に、瓊州府は即ちに漂流民らの出身国、何時どこで漂着したか、どこに着岸したかについて尋問した。事情が判明した後に、瓊州府は漂流民らに食糧を支給し、住居を提供することになった。

この 5 人は最初に村人に食料を求めた。その船には積荷が一切なかった。さらに言葉が通じなかったので、たまたま雍正六年（1728）に暹羅国王の命で中国へ来航する予定が海南島に漂着し滞在していた暹羅国の陳宇と水手林宣が召喚された。この二人が通事として外国人 5 人に質問して事情を聞いている。

その具体的な応答の様子が雍正八年（1730）五月十四日付の「広東総督掲貼」に残されている。

隨據文林都<sup>23</sup>保長張奇陳報稱、本月初七日有小艇番船一隻、番人五名、上村討食、船上貨物據無、不知何番人士何具報明等情。隨喚通事暹羅國番陳宇、船上水手林宣。

問、這五個人是那國的人、叫甚麼名字、那一月日在那里地方、開船要往何処、到那地方被風打破的。

（据通事林宣轉問番人、据林宣供）

供、嗅隴嗎林兩個是西洋莫來由人、又伊□哥安迤密喀兒三個是西洋彌尼喇人。自彌尼喇開船要往鴉喇吧、去約有十天遭風打破、如今又有一月多了。飄到這里不曉

<sup>21</sup> 漂着した外国小船は、雍正六年（1728）十二月に大風に遭遇して海南島の瓊山県に漂着した。「雍正六年十二月内被風漂到瓊山県地方」（『明清史料』庚編第六本、509 頁）による。

<sup>22</sup> 『明清史料』庚編第六本、509 頁。

<sup>23</sup> 文林都については、康熙『瓊山県志』卷一、疆域志、廂都に、「外義豊郷在縣東領都暘二十四」とあり、その中の一つとして「文林都原小林二」とある。確かに、瓊山県の廂都の一都であった。

得什麼地方。

問、 你船上共有多少人口、  
船主水手叫甚麼名字、  
如今都在那裏呢。

供、 船上共有三十五人、  
船主叫做噓吟礎、死了三十個、只存小番水手五人、死的姓名不記得了。

問、 你這五個人怎麼上得岸呢。

供、 小番五個口口、隨大船的脚船上隨流飄到這裏、北洋墩地方登岸、

問、 船上有什麼貨物沒有呢。

供、 只有黃藤海參是船主的、別貨都沒有、船破給漂棄無存。

問、 有客人沒有呢。

供、 沒有客人。

問、 你如今這小船也好駛回本国去麼。

供、 小番們這船小駛不回國。

問、 你這船小駛不回本国怎麼樣呢。

供、 小番們情願賣這船繩有銀子買些衣裳穿等。<sup>24</sup>

応答の内容を日本語に翻訳すると以下ようになる。

問、 この五人の出身国はどこで、名前は何と言うか。

答、 嗅隴と嗎林の二人は西洋莫来由人であり、また伊口哥、安迪、密喀兒という三人は西洋彌尼喇（マニラ）人です。

問、 何時どこから出帆してどこへ行ったのか。どこで大風を受けて遭難したのか。

答、 彌尼喇から猶喇吧（カラパ）へ行く予定でしたが、出帆後のおよそ十日後に遭難し、今まで一ヶ月ぐらい過ぎました。どこで漂着したかわかりません。

問、 船には、何人が乗船していたのか。船主と水手の名は何と言うか。彼等はどこにいるか。

答、 船には 35 人搭乗していましたが、30 人が溺死し、生き残ったのは水手 5 人だけです。船主の名は噓吟礎で、他の人の名前は覚えていません。

問、 5 人はどのような方法で着岸したのか。

答、 私たち 5 人は、本船に乗せていた小型船で北洋墩<sup>25</sup>地方に漂着しました。

問、 船には貨物があったのか。

<sup>24</sup> 『明清史料』庚編第八本、506 頁。

<sup>25</sup> 北洋墩とは、康熙『瓊山県志』巻一、疆域志、山川に「北洋港、在縣東三十里興仁都、港東立墩臺、有兵防首」とある。さらに、民国『瓊山県志』巻十、経政十四、兵制に「沿辺墩臺八所、白沙墩、沙上墩、大林墩、北洋墩、北港墩(以上属左營)、鹽壯沙上墩、小英墩、白廟墩(以上属右營)」とある。確かに、北洋港の東側における沿辺墩臺八所の一つ墩臺であった。図二の地図参照。この地図は咸豊七年『瓊山縣志』巻一、輿地志、輿圖による。

答、 船主の積荷として黄藤と海參がありました、他にはありません。しかし船が遭難したので積荷は一切なくなりました。

問、 乗客はいたのか。

答、 いません。

問、 この船で本国へ帰ることができるか。

答、 この船では小さいので帰国できません。

問、 それでは帰国できない船をどうするのか。

答、 私たちの船と船の縄を売ってお金を得て、服を買いたいです。

以上のように通事となった暹羅国の陳宇や水手林宣は、正確に両者の意思を伝えたことがわかる。地元の文林都保長であった張奇は、暹羅国通事の陳宇や水手林宣の通訳によって、この遭難者の状況がほぼ理解できた。

この外国人 5 人に対する処理方法は、以下のような記録が残されている。

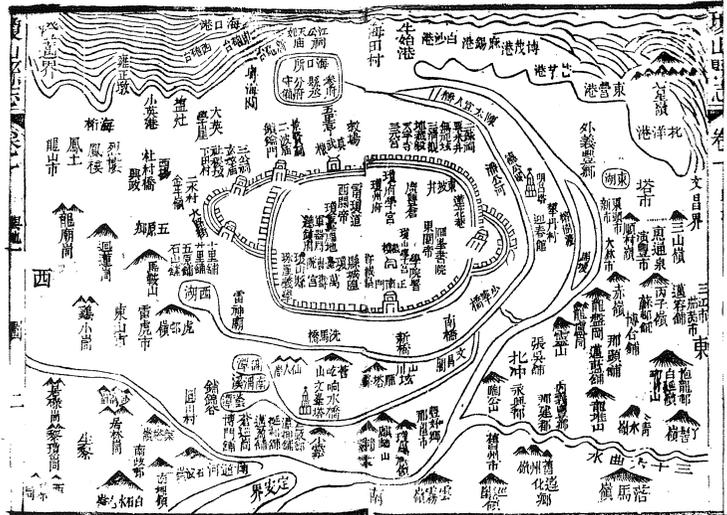
逐日按名給與口糧、但瓊南属在天末、該番水土不服、慮有疾病之慮。並念番人情性不馴。並非地方官能約束。合將該番差役解赴、仰懇裁奪、發遣歸國。<sup>26</sup>

とあり、地元の張奇は外国人 5 人に食糧を支給したが、彼等は中国の気候に適応できず病気になるかもしれないと心配した。そのほか張奇は、この外国人は性格や習慣が違うので、管理し

にくいと考えた。そして雍正七年（1729）正月に張奇は、この外国人等を瓊山県から廣東省の南海県に護送した。

南海県官では、張奇の報告に基づいて再度この 5 人に質問した。南海県の調査から、漂流民の嗅嚨と嗎林の二人は西洋莫来由人ではなく、実は呂宋人であることが判明した。<sup>27</sup>また南海県においてもこの外国人の帰国についての処置を以下に行っている。

据南海県訊明供称、本国並無船隻到、只有暹羅可能搭回本国等語、經詳明俟遣暹羅、船開



図二、北洋港（左上部分に北洋港名が見える）

<sup>26</sup> 『明清史料』庚編第六本、506 頁。

<sup>27</sup> 『明清史料』庚編第六本、506 頁。「據南海縣詳稱訊、據難番嗅嚨嗎林供係莫来由人、伊口哥、安迺、密喀兒供係呂宋人、不是西洋彌尼喇人。」による。

行附搭復飭、南海県按名支給口糧養贍、于雍正七年二月初四日附搭暹羅国船長魏鳴岐副貢船、開行回暹、転搭帰国。<sup>28</sup>

南海県から彌尼喇（マニラ）への直行の船がないため、先に暹羅に行き、そこから帰国することになった。そしてこの5人は、雍正七年（1729）二月初四日に、暹羅国の船に搭乗して、先に暹羅国へ赴きその後、本国へ帰国することになったのであった。

外国人が搭乗した船とは先に広州に来航していた上述の雍正六年九月に中国へ朝貢に赴いた暹羅国の朝貢船である。

#### 4、おわりに

上述のように、清朝が康熙後期から外国米の輸入政策を進めるにともない、特に暹羅国から輸入外米の数量がますます増えてきた。清代における暹羅国からの米穀の免税措置は、暹羅国との貿易を促進した。その一環として雍正六年（1728）六月に暹羅国王の命で中国厦門へ米穀を発売する予定の陳宇や林宣が乗船した船が暹羅国から出帆した。しかし、洋上の大風で同年八月に海南島の滄林港に漂着した。その船とともに、暹羅国は雍正六年（1728）九月に謝恩のために派遣された朝貢船も偶然に広東虎門に到着していた。そのような時期の雍正六年（1728）十二月に、呂宋からの外国人五人が海南島の北洋墩に漂着した。彼等は十一月に呂宋から出帆し咬留巴（カラバ）へ貿易に赴く予定が、出帆後の十日後に海難に遭難し海南島に漂着した。しかし言葉が通じないため、たまたま海南島に滞在していた暹羅国の陳宇や林宣が通事となり遭難者の話を通訳し、遭難者の状況をほぼ理解することができた。その後漂流民五人は南海県に護送された。南海県では漂流民を再び調査し、彼等は帰国の方法を得たのである。

この事件が順調に解決できたのには、外国語に通じた通事が重要な役割を演じている。

暹羅国の船主の陳宇や水手の林宣が通事として記録されていることから、詳しい記述は不明であるが、陳宇や林宣の名が伝統な中国式の名前であることから考えて中国人の可能性が高いと思われる。おそらく彼等は中国人であり長きにわたり中国と暹羅国との貿易に従事し、外国語を理解する能力を持っていたと思われる。

このように、雍正六年（1728）に海南島に漂着したマニラからの漂流民の事件から、中国語通事の業務の一端ではあるが具体的に明らかにすることが出来たと言えるであろう。

**Abstract;** As a great power in East Asia, Qing Dynasty had been paid tribute by other countries. Siam, a small country of Southeast Asia, started paying tribute to China since Ming Dynasty—A dynasty before Qing. Besides tributary relationship, rice trade between China and Siam reached its zenith since the regime of Yongzheng—the medium-term of Qing Dynasty. In June of the 6th year of the

<sup>28</sup> 『明清史料』庚編第六本、509頁。

enthronement of Yongzheng, under the orders of the King of Siam, Chen Yu left for Xiamen, China to sell rice. Unfortunately, Chen's ship encountered a storm and reached Yulin harbor, Hainan Island in August. Meanwhile, in December, another merchant ship reached Beiyangdun, Hainan Island from Galaba Island, Manila, due to heavy storm. Five people on this ship didn't speak Chinese, thus Chen Yu, a translator on a ship from Siam, who happened to be on Hainan Island, played the role of an interpreter, and based on Chen's interpretation, they reached a mutual understanding. So Zhang Qi understood the status quo of these five people. Finally these foreigners boarded a tributary ship from Siam, first arrived in Siam, and then took a sail to their motherland.

This article mainly centers on the incident of the ships drifting from Manila to Hainan Island, and the interpretation between sailors and local officers. I hope this article can discuss how interpreters from Siam to China for trade interpreted in Qing Dynasty.

**Key words:** The enthronement of Yongzheng, China, Siam, The interpreter of Chinese language, Drifters